

校歌は中学部第1回卒業式で歌われたのか？

—水町証言の検証—

松岡 正樹

1. はじめに

現在、西南学院百年史の編纂作業が進められている中で、今まで伝えられてきた学院の歴史について文献等で確認を行っていくと、史実と異なると思われる事項や新しい事実が判明したりしている。その一つが、校歌が中学部第1回卒業式で歌われたという通説に対する疑問である。校歌については作詞者である水町義夫（1885-1967）の証言が残され、その内容がそのまま史実とされて他の文献から検証が行われた形跡は見当たらない¹。そのため水町証言について検討を行い、校歌の完成時期について考察を行いたい。

2. 水町証言の内容

水町の現在確認できる最も古い証言は『西南母校だより』第1号（西南学院同窓会、1954年10月25日、4頁）に掲載の「校歌についての思い出」で、校歌の完成から30数年が経過してからのものである²。次にその内容を引用する。

大正九年十月、時の院長ドージャー先生から第一回の卒業式に、間に合う様に校歌を作って欲しいと云う御依頼をうけ、作りはじめたのであります。

その頃私は、ヨハネ第一書を読みふけて居たのであります。それでヨハネ第一書から、いろいろとヒントを得、又学院の位置環境等を頭の中に画きつゝ、筆

1 西南学院学院史企画委員会『西南学院史七十年史上巻』（学校法人西南学院、1986年、307-308頁）、西南学院本部広報課編『遙けきかな わが行く道 西南学院校歌誕生70年』（学校法人西南学院、1991年、4-5頁）に本稿でも引用した証言が掲載されているが、内容についての検証は行われていない。

2 松井康秀編『西南学院長水町義夫先生著作論文随筆目録』（1942年12月現在）では『西南学院新聞』第46号（1941年）に「西南学院校歌作製の思出」が掲載されたとあるが、同号の所在は確認できない。

をすゝめたのであります。

「岸を洗う紺碧の波」は今も昔に変わりませんが、「松の緑」はむかしの面影は、今は殆ど留めて居らず、作歌当時の大松林のなつかしい姿を偲ぶ由もありません。

「海の青」も「松の緑」も若々しい青春の色であり希望の輝きであり、伸びゆく西南の将来を祝福して居ると云うのであります。

「子等が仰ぐ」と云う「子等」はヨハネ第一書の「我が若子よ」より取った言葉であります。

「仰ぐ」は胸を張って目をかゞやかして仰ぐ姿であります。

「光明」も「生命」も「望も愛」も、ヨハネの言葉であります。「永遠の西南」は「永遠の生命を汝等に告ぐ」から来たものであります。

三週間ばかりで出来上りました。次は作曲であります。

当時私共の教会に、不破と云う女性の方がありました。上野の音楽学校の学生でした。この方に相談し、島崎教授に作曲して頂きました。

十年一月、作曲も出来上り、フルジウム女史に指導して頂き、三月十日³の第一回の卒業式に歌われたのであります。(以下省略)

上記の水町証言などから校歌完成までの経緯を纏めると次の通りとなる。

1. 1920年10月、C.K.ドージャー（1879-1933）から1921年3月に挙行予定の中学部第1回卒業式で歌う校歌の作成が水町に依頼された。
2. 水町は歌詞を三週間ほどで完成した。
3. 作曲は、水町と同じ福岡バプテスト教会員で東京音楽学校の学生であった不破ヒサ子（1901-1945、結婚後は徳田と改姓）を通じて、同校教授・島崎赤太郎（1874-1933）に依頼した。
4. 1921年1月に作曲が完成し、S.F.フルジウム（1890-1973）が学生を指導して、同年3月9日の中学部第1回卒業式で歌われた。

日本の校歌の制定の流れは、1897年前後から小学校を中心に盛んになり、大正期から昭和初期にかけて中学校でも校歌制定の動きが広がったとされ⁴、西南学院もこの動きに沿っていたのではないかと思われる。

3 卒業証書の日付は3月10日付けで、卒業式は前日の9日に挙行された。

4 渡辺裕『歌う国民』中公新書2075、中央公論新社、2010年、144頁。

3. 水町証言の検討

水町の証言によると、校歌は中学部第1回卒業式で歌われたとされている。しかし、次に当日のプログラムを記したが、そこには校歌の記載がなく実際に披露されたのか判然としない。

卒業式執行順序（九日午後一時半）

	司会者	竹本教師
一、プロセッショナル		在校生一同
一、奏楽		フルジェム女史
一、讚美歌（二ノ二百二十五）		会衆一同（一同起立）
一、聖書朗読		波多野教師
一、祈祷		本澤教師
一、君ヶ代合唱（二唱）		会衆一同（一同起立）
一、勅語奉読		竹本教師（一同起立）
一、卒業証書授与並ニ告示		ドージャー学院長
一、讚美歌（二ノ三十五）		グリークラブ
一、祝辞	在校生総代	大久保 熊 太
一、来賓祝辞		
一、答辞	卒業生総代	井 上 精 三
一、讚美歌（一ノ三二）		会衆一同（一同起立）

また、卒業式について掲載された当時の地元紙『福岡日日新聞』（1921年3月10日）・『九州日報』（1921年3月10日）、バプテスト派機関紙『基督教報』（第598号、1921年3月23日）の記事を確認したが、校歌については一切触れられていないのである。

検証を進める中で、もう一点重要な事実が判明した。それは作曲家・島崎の仲介者とされる不破ヒサ子が、卒業式の時点ではまだ東京音楽学校の学生ではなかったのである。『基督教報』第603号（1921年5月4日）に「不破久子姉 福岡教会員なる同姉は、今春、東京音楽学校に入学、専ら声楽を研究さるゝ由」と掲載され、不破は1921年春に入学とされている。東京音楽学校の文献で確認すると『東京音楽学校一覽自大正十年至十一年』（東京音楽学校、1921年）75頁に、1921年7月10日現在の生徒で甲種師範科第一学年に「不破ヒサ子」とあり、不破が1921年春に入学したのは確実である。

東京音楽学校では外部からの依頼を受けて、校歌を中心に多くの作詞・作曲を行っていた。1907年10月以降、同校に公式に作成依頼があったものは記録が残されているが、西南学院校歌の記載がないので、同歌は音楽学校を通さずに個人的に島崎に依頼したものと推測できる。なお島崎が携わった学校関係歌として記録されているのは次のとおりである（年は作曲依頼年）⁵。

- 1910年 静岡英和女学校校歌
- 1910年 千葉県立生実学校校歌
- 1913年 福島県岩瀬郡笠石尋常高等小学校校歌
- 1914年 広島県賀茂郡東志和尋常高等小学校校歌
- 1916年 岡山医学専門学校校歌
- 1917年 東京高等工業学校交友会歌
- 1920年 徳島県三好郡芝生尋常高等小学校校歌
- 1921年 名古屋高等商業学校寮歌
- 1924年 福島高等商業学校校歌〔改作〕

さらに検討を進める中で、西南女学院長を務めた原松太（1885-1958）の回想に作曲の完成時期を示唆する記述があることを見出した。それは『西南学院新聞』第18号・記念特輯版（1936年5月11日）2頁に「西南学院創立二十周年を祝ふ」の寄稿者の一人として、高等学部在職中の思い出を次のように記述したものである。「中学部では、その春第一回の卒業生を出した許り、高等学部では開校第一年目と言ふので学院の何処にも清新の気が漲つてゐた。（中略）水町高等学部長新作の校歌『岸を洗ふ紺碧の波』に対する譜曲が東京音楽学校から回送し来つたので、水町先生御自身指揮の下に講堂で初めて稽古したのを記憶してゐる」。原の在職期間は1921年11月⁶または同年12月から1922年3月⁷までの4、5カ月間であることから、作曲の完成は1921年11月から1922年2月の間ではないかと推測できる。

歌詞の元原稿、譜面原本のいずれも現在の学院内で所蔵は確認できていない。歌詞について現在確認できる最も古い記述は、『基督教報』第643号（1922年3月8日）に

5 東京芸術大学百年史編集委員会『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、962-1052頁。
6 塩川和雄編輯『西南女学院のためにその生涯を捧げられた原松太先生記念誌』西南女学院、1961年、年譜 D-2頁。
7 西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史下巻』学校法人西南学院、1986年、1292頁。

掲載のものであるが、作曲の完成が1921年11月以降とするとお披露目の意味を込めたものと考えられる。

西南学院校歌

一

岸を洗ふ、紺碧の波、松の緑、
青春の色、希望のかげやき、
学院の誇ぞこれ、
西南、西南、わかき西南

二

理想に燃ゆ、子等が仰ぐ、筑紫の空、
高く清し、光明と生命と
学院の望ぞこれ、
西南、西南、愛の学園。

三

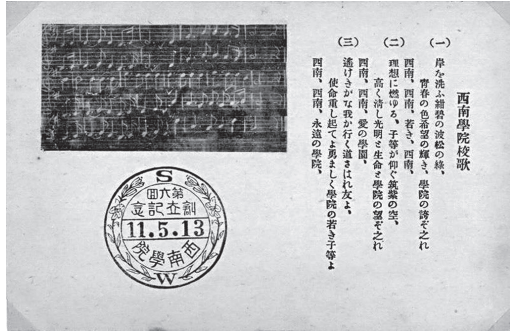
遙けきかな、我が行く道、さわれ友よ
使命重し、起てよ、勇ま^(ママ)しう
学院のわかき子等よ、
西南、西南、とわの学院

(歌詞は水町文学士作、歌曲はフルジウム女史の作也)

歌詞は細かい表記の違いはあるが、現在公認のものと同じといつてよいであろう。なお「歌曲はフルジウム女史の作」とあるが、別の曲があったのか、あるいは誤記なのか今のところ断定できない。

また譜面の最も古いものは「第六回創立記念絵葉書」(1922年5月13日)である(掲載写真参照)。黒板にチョークで主旋律を記した譜面写真の掲載があり、現在の楽譜とほぼ同一である。

校歌が公式行事で歌われたことが確認できる最も古い事例は、1922年3月11日の中学部第2回卒業式である。『基督教報』第646号(1922年4月5日)に次のようにプログラムが掲載され、「九、校歌」と明記されている。



西南学院校歌

- (一) 學を先んずるの彼松の枝、
 青春の色希望の輝き、
 学院の誇をこれ
 西府、西府、若き、西府、
 理想に燃ゆる、
 子等が仰ぐ慕望の空、
 高く清し光明を生命と
 学院の望をこれ
 西府、西府、愛の學園、
 遠けさかな我が行く道はこれ友よ、
 使命重し超てよ勇ましく
 学院の若き子等よ
 西府、西府、永遠の學院、

司会者 波多野氏

- | | |
|-------------|----------------------|
| 一、プロセツショナル | |
| 二、奏樂 | ミル女史 |
| 三、讚美歌九五 | 一 同 |
| 四、聖書朗読及祈祷 | 尾崎氏 |
| 五、君ガ代 | 一 同 |
| 六、勅語捧読 | 竹本氏 |
| 七、独唱 | チャプマン女史 |
| 八、証書褒賞授与告辞 | ボールデン氏 |
| 九、校歌 | 一 同 |
| 十、祝辞 | 西部組合 青柳氏
佐高校長 生駒氏 |
| 十一、別辞 | 弘利氏 |
| 十二、答辞 | 野呂氏 |
| 十三、演説 | 工学博士 荒川氏 |
| 十四、〔讚美歌〕四六二 | 一 同 |
| 十五、祝祷 | 下瀬氏 |
| 十六、挨拶 | ボールデン氏 |

4. おわりに

以上、校歌に関する水町証言について検討を行ったが、その結果、現時点では次のような推測が可能であろう。水町証言では中学部第1回卒業式で校歌が歌われたとされるが、その時点では島崎の作曲は未着手であった。島崎との仲介者とされる不破ヒサ子は、第1回卒業式の後に東京音楽学校に入学しており、その後、島崎に作曲の依頼がなされた。原松太の回想から判断すると、作曲が完成したのは1921年11月以降で、公式に校歌として用いられたのは1922年3月11日の中学部第2回卒業式が最初ではないか。

水町証言では1921年1月に作曲が完成し中学部第1回卒業式で歌ったとされているが、水町の記憶が一年異なっていたとして「1922年1月に作曲が完成し中学部第2回卒業式で披露した」とすると、検証の結果にかなり近いものと思われる。現時点では断定できないが、今後の文献などの発掘、研究の進展によって、校歌の完成時期について確定できることを願っている。